

平成30年度 鳥取県立農業大学校評価システムシート (H31.2.21)

評価基準（達成度）

- A 100%以上達成
- B 80～99%達成
- C 60～79%達成
- D 40～59%達成
- E 39%以下の達成

ミッション	時代の農業を担い、指導的役割を果たす人材の育成・確保
重点目標	○学生・研修生の円滑な就農の支援 (個別指導の強化及び関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化) ○GLOBAL G.A.P.の実践と日本梨における認証取得

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
1	着実な就農	1 求人・求職者情報の就農支援関係機関との共有による就農の促進	1 近年、非農家出身学生が約5割を占める中、農業法人等からも求人が増えており、雇用就農による就農が増えている。 <年次別就農率> H25:50%、H26:80%、 H27:61%、 H28:70%、H29:67% (5か年平均65.3%)	1 学生の就農率65%	1 就農支援関係機関との情報（求人、求職、研修）共有 ・雇用就農相談会による農業法人等求人者および求職者のマッチング ・県内地元就農を目指す学生の就農地農業関係機関との意見交換会の開催	1 農業改良普及所等との情報共有を随時実施。 ・雇用就農相談会を2回開催した（参加者：求人者62名、求職者110名（うち高校生5名））。この相談会をとおし、1年生は自身の就農イメージを具体化することができた。併せて、2年生、研修生のうち7名の雇用就農が内定した。 <学生就農率>59%(10/17) ・親元就農3名（うち1名は3/6実施）、先進農家実践研修者1名、雇用就農後自営就農希望者1名について、卒業後の就農・研修がスムーズに進むよう学生と関係機関で意見交換した。	B		
		2 研修生に対する的確な進路指導の実施	1 社会人向け研修制度として運営している各種研修制度の趣旨はそれぞれ異なり、研修生の受講目的も様々である。就農実現に向けては、制度ごとに研修生のめざす目標を踏まえつつ、個々の背景やレベルに即した指導及びアドバイス、研修進捗状況をおさえながらタイムリーに関係機関との調整を実施していくことが極めて重要である。	1 アグリチャレンジ研修生の就農率：70% ・先進農家実践研修生・スキルアップ研修生のうち自身の経営計画作成率（修了時）：80%	1 各研修において、研修開始時・終了時のみならず、研修期間中の個別面談等を複数回実施しながら、各研修生に適した進路・就農方針に関するアドバイス、必要な関係機関との調整を実施する。	個々の研修生の背景や、目指す就農形態（雇用農、自営・親元就農等）により支援方針が異なるため、随時、個別面談を重ねるとともに、関係機関との方針共有、打合せを実施し、就農支援した。 ・アグリチャレンジ研修生の就農率83% ・先進農家実践研修、スキルアップ研修生の自身の経営計画作成率(修了時)100%（見込み）	A		

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
2	学生・研修生の確保	1 農業大学の魅力発信	1 養成課程入学生数は平成23年度以降、定員割れが続いている。 ・入学者の出願のきっかけに「HPを見て」の声が多いため、その充実が必要である。 <入学者数の推移> H26:23名、H27:23名、H28:21名、H29:22名、H30:24名)	1 入学者数 定員30名確保	1 オープンキャンパス(3回)の開催、学校ホームページの更新による魅力発信 ・高等学校進路指導研究会への参加および県内高校訪問(全校) ・各高校で実施の進路ガイダンスへの参加 ・高校生の職業観の醸成と農業分野への進路選択の機会提供	1 オープンキャンパス2回開催(参加者44名、うち県内出身者33名、入学予定者15名)。 ・HP「農大日記」を中心に、専攻実習等学生の日常を随時更新し、学校の様子に公開に努めた。 ・県内全高校を訪問するとともに高校進路指導研究会に参加し、学校説明を行った。 ・本年度新たに智頭農林高校の学校訪問され、倉農(1回)、鳥取湖陵(2回)と合わせ農業高校3校4回と訪問回数が増加した(H29年度 3回)。うち1回は鳥取湖陵高校1年生の訪問。 ・個別に3名の学校訪問を受入れた。 ・高校5校の進路ガイダンスに参加(予定含む) ・本年度初めて私立学校協会と連携し、鳥取県専門学校進学フェアに参加した。農大ブースの実習体験では花きコース学生が寄せ植え実技指導を行い、18名の高校生が参加した。 <平成31年度入学予定者:25名(2/8現在)> (2次募集実施中:試験日3/16)	B	・冬期のオープンキャンパスについて高校のニーズ調査したところ、学校行事が多く、開催が困難とのこと。夏期のオープンキャンパスに1、2年生の参加呼びかけを強化する。 ・HPによる情報発信を行ったが、コースによる偏りがあり、全コースの情報掲載充実を図る。	・高校3年になると自身の進路をゆっくり考える余裕がない。2年生の間に進路選択の機会になるようオープンキャンパスを冬に開催してはどうか。
		2 農業高校との連携による学生確保			2 オープンキャンパスと農業高校の農業クラブの同時開催による先輩学生との交流 ・農高生対象の就農イメージ相談会の開催 ・農業高校教員の内地留学研修の受入れによる農高生の農大進学動機付けと農大指導職員の教育力向上 ・スーパー農林水産業士に係る食プロ育成講座受講受入れおよび長期インターンシップ受入れ先の選定支援 ・農業教育研究会(教育委員会)での学校紹介および情報交換	2 農業高校3校の農業クラブ員と各高校OBである8名の農大学生との交流会を行い、農大の理解を深めた(農高参加者12名、農大生8名)。農高参加者から3名が入学予定。 ・スーパー農林水産業士認定要件である食プロ育成講座を16名(2校)が受講し、8名がスーパー農林水産業士(農業部門)に8名が認定され、うち5名が31年度に入学予定(野菜3名、作物1名、畜産1名)。 ・長期インターンシップの選定依頼、農業教育研究会の開催はなかった。	B		
		3 IJUターン就農者の掘り起こし	3 就農を目指す一般社会人が事前に進路相談できる機会を確保することも必要である。		3 東京(3回)・大阪(4回)等での就農相談会を通じて就農のための道筋や支援制度の紹介し、就農希望者の掘り起こしを行う。	3 移住フェア、新農業人フェア、IJUターン相談会等に参加し(大阪3回、東京5回)、就農希望者の相談に応じた。 ・相談者が就農を目指し、アグリチャレンジ科に入校された。 (29年度相談者から1名(H30) 30年度相談者から7名(H31予定))	A		

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言	
3	学生の総合的経営能力の向上	1 学生個々の状況に応じた個別指導の充実	【養成課程共通】 1 学生の就農意欲や体力、学力は千差万別で、専攻実習での技術習得には個々の能力・スピードに応じたきめ細やかな指導が必要である。	1	1 各コース毎に「理解度アンケート」を実施し、技能習得状況について学生と職員の共通認識を図る。学生の苦手分野の克服、作業時間を含むコスト意識の醸成するための指標として活用する。 理解度アンケートの実施（7月、1月 2回）とそれを基にした個別指導（随時）	1 「理解度アンケート」により判定した、知識・技能の理解度、習熟度を基に、面談、指導により、技能習熟度が向上した。 ・理解度アンケート実施（7月、11月）（詳細は各コースごとに記載）	A	・農作業安全に対する知識習得、安全対策の実行を図る。 ・実習中の軽微な事故やヒヤリハットを学生・研修生・職員が情報共有し、事故を起こさないように指導する。	・授業中に学生がミスをした場合、それが事故に繋がらないように、ミスをした学生だけでなく、全体で確認、共有することが大事。	
		2 計算能力を含めた基礎学力の向上	2 営農技術のなかには、圃場面積の計算、施肥量の決定や農薬の希釈など、計算能力が求められるが正確に計算できる学生が少ない。	2	2 1年生の基礎学力（計算、単位など）を把握し、学力補完のための補講を行う。また、1・2年生とも専攻実習で、実践的に肥料・農薬計算を実施する。 ・1年生学力補完補講座（20回） ・学力テスト（随時） ・専攻実習時の実戦力評価（随時）	2 ・22名中16名の学生に対し学力補完講座を17回実施した。 ＜合格水準達成率＞27%(6/22)→100% ・各コースの農場実習（肥料、農薬、種子等散布）により実践力を磨いている。	A			
		3 幅広い農業知識の習得と販売実習による経営感覚の向上	3 多様化する農業形態のなかで営農するためには、コースを枠を超えて幅広い知識と技術を身につける必要がある。またモノを作るだけでなく、「売る」ことも意識させることで経営感覚をもった農業者を育成する必要がある。	3	3 「校内技術競技」を行い、各コースから出題される問題（筆記・実物鑑定）を解きその点数を競う。また校外で「農大市」を実施し、商品PR方法などを学ぶ。対面販売を行うことで消費者ニーズを把握し、生産販売に活かす。 ・校内技術競技実施（2回） ・農大市実施（校内3回、校外3回） ・修農祭での販売（1回）	3 ・校内技術競技の開催（6/20、10/24） ・1、2年生が一緒に事前勉強するコースも見られ、学習意欲の向上につながっている。 ・農大市や修農祭において、ポップに工夫をし、商品PRに努めるとともに、普段人見知りの学生も含め積極的に接客した。 ・農大市や修農祭におけるPR活動に積極的に取り組みようになった。就農祭ではNHK「ふるさと伝言板」に学生10名が出演するなどし、過去最大の来場者数となった。 ・農大市（校内4回：7/12、8/10、9/11、12/6、校外3回：6/23、8/25、9/29、10/13） ・修農祭（11/23） ・各コースにおいて、生産物販売を通して、コストや損益分岐点を計算させ、単価設定をさせた。	3 ・販売実習後の反省評価を具体的に行い、生産、販売、出荷、イベント企画実施に反映させる。 ・コミュニケーション力や接客訓練を実施する。	A	・一般消費者に売ることの難しさ、自信を持って得ることなど引き続き取り組んで欲しい。 ・沖縄農大は経営について教えていた。しかし、経営は実際に携わってみないと分からないもの。一握りでも理解する学生ができればいい。 ・経営には山もあれば谷もあることを教えて欲しい。	
		4 地域で頑張っている卒業生等を訪問して自己の就農意欲を高める	4 非農家出身の学生割合が高くなってきていることから、地域で頑張っている農業者等を訪問し、就農・農業法人就職等に向けた意識付けが必要である。	4	4 農家・卒業生等の訪問・視察（各コース2回以上）	4 農家・卒業生等の訪問・視察 合計21回：果樹4、野菜6、花き3、作物3、畜産5 ・学生が具体的な進路や就農のイメージを持つことができるようになった。 ・自分の目指す就農に必要な資格を知り、フォークリフト、移動式クレーン等の資格を取得した。	4	A		
		5 GAPに関する講義の導入及びH30認証取得	5 近年、農業のグローバル化や食の安全意識の高まっており、生産工程を管理する手法（GAP）の教育が必要となっている	5	5 ・1年生対象にした講義（10回） ・GAP認証取得（日本梨）	5 ・グローバルGAPに特化した講義について1年生を対象に年10回実施 ・各コースで改善取組を行う。 ・この学習の成果目標として、今年度は「日本梨」での認証取得を目標とする。	5 ・GAP普及推進機構から専門家を招き、グローバルGAPの理念から具体的なリスク評価、手順書の作成方法等に至るまで講義・演習・ワークショップを実施した（6/21～2/4、10回）。 ・講義を通じ、当たり前ことができていることがなかったこと、同じことの繰り返しを怠らぬ続けることの大切さ、整理整頓の大切さ、表示の大切さなどへの意識が高まった。 ・全コースで整理整頓や掲示（見えるか）に取り組んだ。 （詳細は各コースに掲載） ・果樹コースの学生を中心に「日本梨」での認証審査を受け、GLOBALG.A.P.認証を取得した（1月29日付）。	5 ・指導方法のマニュアル化。 ・日本梨の認証の継続取得。 ・野菜における新規認証取得。	A	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
4	学生の専攻 営農技術の 向上	【果樹】 1 ほ場管理に係る主体性、責任感の醸成	1 永年作物である果樹の栽培技術を2年間の限られた期間で習得する事は困難である。よって、技術習得を図るためには、学生が主体的に責任感を持ってほ場管理を行わせる必要がある。	1 「1,2年共通」 理解度アンケートでほ場作物の管理に関する項目について、職員評価で「できる」以上が80%以上	1 「1,2年共通」 ・1人に1樹「1,2年」の担当樹を割り当て、年間を通して栽培管理を行わせる。 ・梨等の栽培管理に関する基礎知識習得のための小テスト実施	1 「1,2年共通」 各学生が人工交配、摘果、剪定等、自分の担当樹の管理作業を最後まで責任をもって行った。 2年生は1年時より作業の正確さ、スピードが向上し、自信が付いた。 【理解度アンケート】 できる以上の割合：83%	A		
		2 新技術、新品種に係る技術習得	2 本校では、新技術、新品種を積極的に導入し、生産体制が整いつつある。これらを活用して生産現場の現状や将来的ニーズに応じた知識・技術の習得を図る	2	2 ・新品種研修会、ジョイント仕立て研修会、現地視察等の参加（4回程度/年） ・新技術であるナシの「ジョイント仕立て」の栽培管理に対して、全学生が関わりをもつために担当を決定し、技術習得、向上を目指す。	2 ・園芸試験場で行われる新品種及びジョイント仕立て研修会へ参加、および島根大学農学部へ視察研修で訪れ、より専門的な知識や技術習得を図り、校内での実習やジョイント学習の参考となった（4回）。 ・2年生3名が農研機構果樹研究所（つくば）で研修を受講した。県内では学べない果樹栽培に係る最先端の技術を学び、「将来の就農に向け良い勉強になった」との意見があった（1回）。	B	現場の生産者の実態（取り組み）を見る機会も設け、現場における栽培や経営の工夫を学ばせる。	・新しい技術は学内で取り組めないものもあるだろうが、試験場やメーカーなどと協力して新技術に触れる機会を持って欲しい。
		3 GLOBALG.A.P.の取り組み	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	3 ・リスク改善による適合基準達成割合：100%（認証取得）	3 ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策の検討する。 ・全ての日本梨園場及び関連施設で活動実施	3 ・学生が主体となってリスク点検、評価を行った。その結果をもとに、対策を話し合い実践した。認証審査は12月21日に行われたが、審査対応も学生が中心となって行った。その結果、認証を取得した。 ・身の回りにリスクが多い事、やるべき事が出来ていない事等の気づきがあった。 ・基本的な整理整頓の重要性、多くの人と意見を交わすことで、より良い改善策が得られ実行できる事等を学んだ。また、自ら率先して片付けたり、手洗いに對する意識が向上したり、食物を扱う事への責任感の向上等、学生の意識に明らかな変化が見られた。	A	学生主体の取組となるような支援を行う。認証の継続と併せて、更なるリスク軽減を検討し、改善を行う。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		【野菜】 1 栽培基礎技術の向上とプロジェクト学習による実践力の養成	1 コースの学生13名のうち、農業高校以外の出身者が10名(76%)、また、非農家の学生が8名(60%)を占めており、農業に関する基礎知識及び技術の習得支援を進めている。 将来的な独立就農の意向を現段階で5名(38%)の学生が示しており、実習のレベルを個別的就農目的に合わせて充実させることが重要である	1 理解度アンケートで、鳥取県の主要品目それぞれの「できている」評点が80%以上とする。 「2年次」 スイカ、メロン(プリンス、エリザベス)、トマト(大玉、ミニ)、白ネギ周年栽培、ハウレンソウ、ブロッコリー 「1年次」 秋冬ネギ、ミニトマト、ハウレンソウ、秋冬ブロッコリー 「共通」 ・経営計画書作成：100% ・日商簿記3級程度の清算表作成：80%	1 「2年次」 ・各自の興味や進路事情合わせたプロジェクト課題に対応した品目を担当させる。基本的にハウス1棟を管理させ、長期的な作業計画が立てられる実践力を養成する。 ・2年生は1年生の補佐を行わせる。 ・主要作業については、担当者に作業内容についてホワイトボードで説明させる。 「1年次」 ・露地およびビニールハウスで栽培実習を行い、農業基礎技術の習得を図るため、数品種の作物を担当させる。 「共通」 ・県内主要品目であるスイカ、メロン、トマト類、白ネギ、ブロッコリーの栽培を行わせる。 ・担当作物での就農を想定した経営計画書を作成する。(2年生：複数品目、1年生：担当している1品目) ・小テストの実施。(農薬・肥料計算、栽培管理、簿記記帳、財務諸表)	1 「2年次」 各品目の育苗、耕耘、畝立て、誘引等の栽培管理や収穫調整を正確に行うことができるようになった。また、それら管理を1年生説明、指導することができる。 理解度アンケート：「できる以上」100% 「1年次」 担当作物の管理の基礎、適期管理の理解が進み、2か月先までの作業計画を立てられるようになった。 理解度アンケート：「できる以上」71% ・農家への視察等により卒業後の就農イメージが具体化できるようになった。 「共通」 実習内容を日誌に記帳する習慣化つき、?。県の主要品目について、2年生はほぼ栽培できるようになったが、1年生は担当作物の管理にとどまった。 経営計画について、2年生はほぼ完成したが、1年生は理解が進まず、日商簿記3級程度を理解することは困難と判断し、1名のみの重点指導に切り替えた。 経営計画：2年生(100%)、1年生(70%) 清算表作成：12%	B	「共通」 日商簿記4級合格程度の貸借対照表作成を目標に変更する。理解の進まない学生に対し、補講を行う。	・簿記で大事なことは勘定科目と仕分けだが、近年は簿記ソフトを用いたパソコン入力の時代であり、勘定科目が理解が必要。 ・経営分析まで進めたいということだが、勘定科目まで仕分けしなくても合計経費が分かれば大きな意味での経営分析は可能。 ・パソコン入力の時代だが、その前に手書きを憶えておくことは大事であり、日々の記帳の大切さを教えて欲しい。
		2 環境保全型農業の実践	2 環境負荷を軽減する農業への関心を示す学生もおり、これらのニーズに対応した実習を行う必要がある。	2 特別栽培農産物、有機栽培等の実施。	2 有機栽培実習と、鳥取県特別農産物の認証を受けた栽培を実施し、栽培管理履歴の記帳、特別栽培及び有機栽培認証のために必要な管理技術について理解させる。(特別栽培農産物3品目)	2 特裁認証している琴浦ミニトマト生産部、大原トマト生産部に現地視察に行き、特裁農産物の栽培から出荷までの流れが理解できた。特裁、有機農産物は取組者が少なく、出荷量の確保や技術向上を図る上で、取組者が増加することが重要であることを理解した。 エリザベスメロン、ナス、トマト 計3品目	A		
		3 GAPの取組	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	3 生産工程におけるリスク点検(調製台、資材庫、機械庫の整理)	3 生産工程管理に係るリスク点検について理解を深め、学生主導で改善に努める。 (1)調整室：異物混入の危険性、衛生管理。 (2)資材庫：肥料等の在庫状況を把握し、資材の無駄を省く。 (3)機械庫：燃料の間違い、整備不良の確認。	・専攻教室、調製室、ガラス温室、ビニールハウス、露地圃場、農薬庫、資材庫、機械庫、堆肥舎における、リスク点検を学生が主体となり実施(1月、全体検討3回、土日・専攻時間を利用し実施)。 ・抽出したリスクに対する改善案を検討(2月、1回)し、リスクと改善点の多さに気づき、計画的、継続的に改善を進めることの必要性を認識した。	B	・学生主体で改善が進むよう、毎週各班長と進行状況をチェックする。 ・抑制ミニトマトのGLOBALG.A.P認証取得を目指す(10月審査予定)。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		【花き】 1 栽培基礎技術の向上と花の売れる時期を目指した栽培の徹底	花きの栽培基礎技術を習得し、新技術や本県に適する新品目の導入を積極的に行うことで、更なる栽培技術の向上を図る必要がある。 花は嗜好品であり、必ずしも生活に必要なものではないため、需要・消費拡大を図るには、多種多様な人に花の良さを理解してもらう必要がある。	1 ・理解度アンケートで花きの栽培基礎技術に関する項目で「できている」以上の評価が80%以上。	1 生産面では、学生に担当品目を持たせ、栽培管理を行うことで、基礎技術の習得、責任感の醸成を図る。また、花き生産では消費者が求める時期（お盆、彼岸、年末等）に出荷することが大変重要なため、開花調節技術等を取り入れ、常に出荷時期を意識した栽培管理を行う。販売面では、消費者に手にとってもらえる出荷物・商品の作成を目指し、花束、寄せ植え作成などの体験から、色の併せ方、使用方法、商品PR方法等について学習し、販売方法の改善・提案へと結びつける。 ・作業の確認と作業日誌の記載の徹底 ・プロジェクト活動の進行管理 ・とっとり花回廊での研修等	1 (1)生産面 ①実習作業の確認、作業日誌の記帳により毎日の振り返りを行い、基礎技術の習得を行った。②プロジェクト学習の進行管理を随時行い、学生が主体的に取り組み、課題解決手法の習得に努めた。1名が野菜・花き普及員研修会で発表した。③とっとり花回廊での花壇苗研修に参加し、新たな知識習得に取り組んだ（1・2年生各1回）。これらにより、学生の基礎技術の向上が図られた。 (2)販売面 ①開花調節技術を使い、需要期（お盆、彼岸等）の出荷を行った。②母の日に多肉植物の寄せ植えを作成し、商品PRの工夫（POPをつけて）をして販売を行った。これらにより、需要期を意識した販売の重要性を理解し、販売意識が高まった。 ・理解度アンケート「できている」以上評価83%	A	学生が自主運営を行い、技術の習得、責任感の醸成をさらに図るため、担当品目ごとに年間栽培スケジュール等を作成させる。	・昨年は猛暑の関係で盆の菊が少なかった。野菜でもその年の気象条件で作柄が大きく変動する。過去の気象状況と生育状況を元に、今年の電照開始時期をいつにするのかなど栽培管理をどう進めるかを考える必要がある。
		2 花き品評会への参加、県内先進農家への視察			2 「花のまつり（鳥取県花き振興協議会主催）」の中で開催される鳥取県花き品評会に出品を行い、県内花き生産者の高い技術に接することで、意識向上を図る。 ・花き品評会への出品参加 1学生あたり1点以上 ・県内先進地視察2回 ・県内農家研修1回/人等	2 ①花のまつり「花き品評会」に1人1点以上出品し、花壇苗で優秀賞を受賞した。学生のモチベーションが高まり、さらに県内生産者の高い技術に触れる良い経験となった。②県内先進地視察を行うとともに（8月北栄町、11月大山町、1月北栄町）、県等主催部会に3回参加した。また島根農大の花きコース学生との交流会について、学生が研修内容を企画立案し、盛大に開催した。③新規取組として、湯梨浜町で開催された「花と緑のフェア」の箱庭チャンピオンに参加し、人気投票1位を獲得した。これらにより、積極性、学習意欲が向上した。	A		
		3 新たな需要・消費拡大への取り組み		3 ・理解度アンケートで花きの新たな需要拡大に関する項目で「できている」以上の評価が80%以上。	3 新たな需要拡大として、「花育」活動を行い、学生自身の花に対する理解を深める。また、「花育」活動を通じて、花の良さの普及方法を体感する。 ・「花育」活動 1回等	3 ①「花育」活動を4回（10月、12月、2月2回）実施し、園児等に指導する立場から強い責任感を持って、積極的に花の知識習得に努め、花の理解度が深まった。また、園児等が喜ぶ姿を通して花の魅力を再確認した。 ・理解度アンケート「できている」以上評価100%	A		
		4 GAPの取り組み	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	4 ・生産工程におけるリスク点検（資材庫、農薬庫の整理等）	4 ・生産工程におけるリスク点検等について理解を深め、可能な取り組みから優先的に改善活動を実施する。	4 ・学生が中心となり、リスク点検を行いながら、資材庫等の整理を実施中（2月現在）。 ・花き部門においても生産工程管理の重要性を認識してきた。	B	農薬庫等の整理。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		【作物】 1 農業機械操作技術の習得	1 トラクター、田植機、コンバイン等の機械操作は未経験の学生がほとんどである。	1 ・理解度アンケート（よくできる、できる、もう少し、できないの4指標）でのトラクター、田植機、コンバインの操作に関する各評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。 ・耕耘技術競技の実施 50分/10a以内が50%以上 【参考】前年平均時間 49分41秒	1 学生の技術習得を図るためには、実習量を多くする必要がある。そのため、農大の管理ほ場面積を維持しつつ、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け、水田での作業面積を確保する。また、トラクターでの耕耘技術競技を実施し、技能向上を図る。なお、座学での学習時間も確保するため、学生数に応じた実習量とする。	1 ・学生1人当たり3枚以上の水田で実習を実施。 ・作業機の脱着、作業前の注油、圃場への運搬、作業に応じた各種機械の設定、オイル交換等の簡単なメンテナンスができるようになった。 ・ほ場の形状に応じたコース取りも自分で考えられるようになり、作業スピードも向上した。 ・大豆、小豆、白ネギ、ブロッコリーの栽培に使用する機械類も操作能力が向上した。 ・その他、就職に向け、フォークリフト、玉掛け、小型移動式クレーンの資格を1年生全員が取得。 ・湛水直播栽培や密苗栽培など新技術にも取り組み、栽培管理を通して、技術のポイントや省力効果を学んだ。 ・担当水田の管理を通して栽培管理のポイントや病害虫の特徴、防除方法、水管理の重要性などを学んだ。 (評価指標) ・トラクター、田植機、コンバインの操作「できる」以上の評価 100% ・耕耘技術競技の実施 2年生 50分/10a以内 100% 1年生 (3月実施予定)	A		・作業機の脱着時に作業機が足の上に落ちて怪我をすることがある。怪我を防ぐためには長靴でなく安全靴。 ・耕耘協議の50分/10aは時間がかかりすぎて、生産現場では30分/30a。丁寧にすると手をはたいて早くするところなど教える必要がある。
		2 有機栽培技術の習得	2 有機栽培に漠然とした興味を持って入学する学生が多いが、具体的な栽培管理は未経験である。	2 ・理解度アンケートでの有機栽培技術に関する項目で「できる」以上の評価が80%以上。	2 有機栽培技術導入ほ場を設置し、栽培技術の習得及びメリット、デメリットの理解を図る。	2 ・有機栽培技術導入ほ場を2ほ場設置。 ・チェーン除草作業や草取り作業を全員が手伝い、除草対策の方法や重要性、必要な労力を学んだ。 ・適切な管理技術を習得し、540kg/10aの収量を確保した。 (評価指標) 「できる」以上の評価 100%	A		
		3 白ネギ、ブロッコリーの栽培技術習得	3 法人就農を目指す学生も多く、水田農業の複合経営で取り入れられることが多い白ネギ(秋冬)やブロッコリー(秋冬)の栽培技術の習得も必要。	3 ・理解度アンケートでの白ネギ、ブロッコリーの栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。	3 白ネギ(秋冬)、ブロッコリー(秋冬)を栽培	3 ・白ネギ(秋冬) 2.6a、ブロッコリー(秋冬) 3aを栽培。 ・1年生全員で管理を行い、播種、育苗、定植、土寄せ、防除、収穫調整などの基本的な技術を習得した。 ・出荷作業を通して、販売先による販売数量や単価、手数料、出荷経費などの違いを学んだ。 (評価指標) 「できる」以上の評価 100%	A		
		4 GAPの取り組み	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	4 ・リスク点検及び改善箇所 1か所以上	4 講義で学んだGAPに関する手法を実習の中に取り入れ、リスク点検及び改善活動について、学生への意識定着を図る	4 ・整理整頓やリスク点検に基づく改善を意識的に行い、学生への意識定着を図った。 ・作業後の清掃、整頓の行動が定着した。 ・作業の安全性確保に対する意識が定着した。 (具体的な改善事例) ・倉庫内の整理整頓、置き場の表示 ・教室内の整理整頓、置き場の表示 ・トレーラーに田植機、コンバインの走行ラインを表示	A	使用する施設、機械、器具、備品の整理整頓、置き場の表示などの改善を図る。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		【畜産】 1 家畜(牛)の繁殖、生理に関する基本的知識を踏まえた管理技術の習得	1 畜産コースにおいて、学生7名のうち、農業高校以外の出身者が4名(57%)、また非農家出身学生が3名(43%)と多いため、特に基礎的な知識・技能を重点に習得させることに力を入れている。	1 理解度アンケートにより、牛の発情行動、健康状態のチェックができる以上の評価が80%以上に向上。	1 牛舎及び放牧場、運動場等における牛の発情行動及び便の状態などを継続観察させ、健康と異常とをチェックできる目を養い、健康に管理する方法を習得する。	1 ・月2回程度開催する畜産ゼミにおいて、基礎から最新の畜産情報を提起して、知識習得、技能の向上を図った。 牛の管理における「理解度アンケート」 「できる」以上：7月71%→1月90% ・牛舎作業や発情発見ができ、また2年生全員が人工授精を実施し、全て受胎した。	A	実践力の向上を図るため、畜産ゼミに実践的なメニューを追加する。	
		2 家畜管理用機械の操作技術の習得、飼料用作物関係機械の操作技術の習得	2 畜産関連業種又は農業法人が本学畜産コース学生に求める人材とは、家畜(牛)の基本的管理技術及び畜産の管理用機械(ホイローラー等)、飼料用作物関係機械の操作技術を習得した人材である。	2 ・理解度アンケートにより、コンプリートミキサー、ホイローラー、搾乳機械の操作が日常的にできる。マニユアスプレッター、ロールラッピングマシン、コーンハーベスター等の操作が1人でできることの評価。 ・大型特殊・牽引免許以外の免許(小型車両系建設機械、フォークリフト、アーク溶接等)取得者割合50%	2 ・①飼料給与・調製、②牛舎内の糞及び敷料の搬出・運搬、③糞乾燥機械の操作④搾乳作業等日々の継続した飼養管理の継続実施を図る。また、⑤飼料用作物関係機械(堆肥及び肥料散布～収穫・調製作業)については体験実習を実施する。 ・就職就労先での作業に対応できるよう、必要な免許を取得することを奨励する。	5月：牧草収穫、堆肥・肥料散布、トウモロコシ播種、8月：圃場周辺電柵設置、9月：トウモロコシ収穫、堆肥肥料散布及びイタリアン播種等各種作業を実施。 ・学生が作業を分担し、流れ作業の中で自分の役割を自覚して作業できるようになった。 ・日々の畜舎作業で、学生がミニローダー、TMR調整機器を使用し、機械操作が習熟した。 機械操作における「理解度アンケート」 「できる以上」7月72%→1月89% ・その他技能資格については、危険物取扱丙種および大型特殊免許農業限定解除をそれぞれ1名、2名が取得した(取得者割合28%)。	A	大型機械を操作する機会が多い圃場作業に学生を参加させ、指導する。機械操作の習熟と併せ、安全意識と行動の徹底を図る。	・ラッピングマシンの老朽化している。更新が必要。 ・以前、畜産科では小型車両系建設機械の資格を必須としていた。必要な資格ではないか。
		3 牛の繁養、誘導技術の習得	H29年9月には5年に一度の全国和牛能力共進会が宮城県仙台市で開催され、農大の和牛1頭が系統雌牛群4頭セットで出品し全国4位になった。本年では乳牛及び和牛の共進会が県域あるいは地域で開催予定です。	3 各共進会への出品頭数(中部酪農祭2頭以上、県共1頭以上)	3 乳牛および和牛の共進会に参加を目指して飼養管理技術の習熟と育種改良の面についても充実を図る。	・6/23中部酪農祭にて乳牛2頭出品し、1年生2名で対応した。うち1頭が2席に入賞した。 ・7/27中部畜産共進会(和牛)に1頭出品したが選に漏れ、県畜産共進会に出品できなかった。 ・10/6県畜産共進会に乳牛1頭出品する予定だったが、台風の影響で中止となった。 ・各種共進会への出品を通して、飼養管理による発育改善の重要性を意識するようになった。	A	地区および県共進会での入賞を目指し発育の確保および調教技術、毛刈り技術の習得を図る。	
		4 GAPの取り組み	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	4 牛舎周辺の資材整理	3 生産工程におけるリスク点検等について理解を深め、可能な取り組みから改善活動を実施する。特に、整理整頓清掃(3S)に重点を置く。	・以下の改善取組を行った。 畜舎周辺の衛生管理区域の出入りに車両消毒用噴霧器を設置した。飼料庫に飼料名を見やすく掲示した。 ・器具庫の整理整頓を実施中。	B	器具庫内や牛舎周辺の不用品処分を行う。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
5	学生の農業機械操作技術の向上	1 大型特殊免許とけん引免許の取得	1 就農や農業法人へ就職を目指す学生にとっては、トラクター、コンバイン等の大型農業機械の運転操作を行う上で大型特殊免許の取得が必要。また水稲・畜産関係へ就農や農業法人へ就職を希望する学生は、けん引免許の取得も必要となっている。	1 ・1年生の大型特殊免許の合格率(100%) ・1年生のけん引免許の合格率(90%)	1 試験日までの練習期間が限られているため、練習日を計画的に設定する。(1日当たりの練習は、極力少人数で行い1人当たりの練習回数(乗車回数)を十分確保する) ①大型特殊免許 4人/日、練習回数4回~5回/人 乗車回数16回~20回/人 ②けん引免許 5人/日、練習回数8回/人 乗車回数32回/人	1 練習日を計画的に設定し、教習乗車回数を確保し、運転操作の習熟を図った。 ①大型特殊免許 合格率 95% (18人/19人中) ②けん引免許 合格率 89% (16人/18人中)であった。	B		
		2 農業機械の操作技術の向上	2 卒業後に就農又は農業法人へ就職する学生は、刈払機やロータリー耕耘の運転操作は必須であるが、操作の苦手な学生も見受けられるため、当該学生のレベルアップが必要。	2 ・確認試験の合格点達成率 草刈り(80%)、耕耘(80%)	2 農業機械の取り扱いに不慣れた学生に農業現場で使用頻度の高い、刈払機及びロータリー耕耘の補充的に追加実習を行う。(指導対象学生は各コース担任と相談の上決定) ○刈払機(10名程度) ・重点指導期間(7月~11月)、実習(草刈り)5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート ○ロータリー(8名程度) ・重点指導期間(7月~11月)、実習(耕耘)5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート	2 ・刈払機については、取り扱いの基礎講習を行い(5月)、安全な使用が可能と判断したうえで、各コースの実習作業を許可した。 ・ロータリーの使用については、大型特殊免許取得者(20名中18名)のみとし、夏以降各コースで細やかな指導を実施した。 ・草刈り、耕耘(管理機を含む)の農業機械操作が未熟な学生は2名に対し追加指導を行い(2月)、機械操作の習熟を図った。 ・スマート農業の理解を深めるため、県内業者の協力により実習水田でのドローンによる除草剤粒剤散布の実演を行った(6月)。	B	・アンケートは自己評価である。習熟度判断をコース担任等により補足する。 ・スマート農業の理解に向け、ドローンの他IT利用の農業技術について、視察等を行う。	・ITの時代であり、ドローンなどあってもいいのではないかと。
		3 農業機械の点検整備技術の向上	3 使用する機械の操作技術の習得のみならず、その点検整備についても基本知識の習得と技術の向上が必要である。	3 ・確認試験の合格点達成率 知識(100%)、実技(100%)	3 使用機械の構造と点検整備の手法について学ばせる。 ○取扱説明書の重要性・点検整備の重要性を認識させる。 ○機械の取扱説明書の熟読、頻繁な目通しによる知識の向上を図る。(試験) ○機械の点検整備(日常点検・定期点検)の反復による技術の向上を図る。(実技・確認)	3 ・取扱説明書は、点検整備の知識のほか機械の高寿命化や修理費の節減に役立つことを繰り返し教えた。 ・各コースで使用する機械について、グループ学習させ、知識・技術の向上を図った。また、各学生の点検整備手順を実践させ、評価指導を行った。 ・確認試験(高使用頻度の機種)の合格点達成率は100%であり、取扱説明書を見ながら点検することができる。	A		・刈り払い機の刃を留めるネジが緩むと機体の振動が大きくなる。そういうことも教えて欲しい。
		4 農作業安全意識の向上	4 農作業事故を未然に防ぐためには危険箇所、危険行為を事前に予測、把握することが重要であるが、学生にはその意識・知識が乏しい。	4 ・農作業安全関連授業の実施(2回/5回) ・校内ハザードマップ(仮称)の作成(12月)	4 農作業安全の授業を設定する。また学生の事故防止の参考につながる啓発資料を作成する。	4 ・農作業安全関連授業を2回実施。 ・各コースで危険箇所をピックアップさせ、校内ハザードマップを作成した。 ・現場を回り、具体の危険について考えさせた(12月)。特に、大型機械を利用するコース学生の安全意識が高くなった。 ・消防署と連携し、消火器の種類や熱中症者の助け出しの方法等の講義と実習を行った。 ・熱中症においては尿の色による簡易判定法を全トイレに貼付し、注意喚起した。	B	・農業機械の危険操作に係るビデオ等を活用し、全学生の安全意識の向上を図る。	・熱中症の対処法や火災の対処法を教えて欲しい。

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
6	社会情勢に即応した実践教育の実施	1 実用性の高いプロジェクト成果の確保	1 農業現場での実用技術の習得並びに課題解決手法を習得する目的でプロジェクト活動(卒論)を実施している。 平成28年度プロジェクト成果の果樹1件、野菜2件の成果を農業改良普及所果樹特技および野菜・花き特技研修会で発表した。	1 各特技普及員研修会、果樹研究同志会、農協生産部など校外での発表	1 課題解決手法の習得を意識するとともに、生産現場のニーズに応えられ、学生が就農後に活用できるプロジェクトの完成を支援する。	1 プロジェクト研究の指導を行い、17名全員が研究内容の取りまとめ、発表した。校外においては、下記の研修会等で発表を行った。 ○直播栽培研究会(1/9) 1名 ○野菜・花き普及員研修会(1/30) 2名 ○農業青年冬の集い(2/6) 2名 ○果樹普及員研修会(2/8) 1名 本校の代表として中国四国ブロックプロジェクト発表会に参加した学生が優秀賞を受賞し、全国大会の代表に選出された。その結果、最優秀、優秀に次ぐ特別賞を受賞した。	A		
		2 資格・免許取得	2 卒業後の就農(自営、雇用等)に即応するため、大型特殊・牽引免許の他、様々な資格・免許取得を推奨し、取得支援を行っている。	2 大型特殊・牽引免許(農耕車限定)以外の資格・免許取得者割合50% 日本農業技術検定合格者割合60%	2 資格・免許取得者数、取得資格・免許数を確保する。	2 大特免許・牽引免許(農耕車限定)以外の資格・免許取得のための支援を実施し、取得した。 ・大型特殊免許限定解除: 2名 ・危険物取扱者資格: 1名 ・フォークリフト: 6名 ・小型移動式クレーン: 4名 ・玉掛技能: 4名 ・家畜人工授精師: 5名 (取得者割合: 29.7%(11名/37名)) ・日本農業技術検定: 2級0名、3級13名、合格者割合52%	C	・学生の希望する就農に必要な資格を知らせる。 ・資格試験の実施時期のスケジュールを早期の情報提供する。	・フォークリフトの資格を校内で取得できるようにしてはどうか。
		3 地域社会活動への参加	3 1, 2年生ともに履修内容に地域貢献活動(ボランティア)盛りこみ、地域社会の一員としての自覚の醸成を図っている	3 ボランティア実施率100%(一人年2回) コミュニケーション能力向上講座(2回)	3 地域貢献に対する意識啓発とボランティア活動への積極的参加を促す。また、コミュニケーション能力向上に向けた講座を設ける。	3 学生の地域貢献活動を「農村社会と文化」等の講座の単位の一部として評価。 ・全員が2回以上のボランティア活動を実施見込。 ・ボランティア活動を通じて、地域の人との交流や人の役に立つことの喜びを感じる等の意見があった。 ・コミュニケーション能力向上講座を開催予定(1年生、3月13日)。	B	ボランティア参加を先延ばしにし、機会を失する学生が多く、年度当初に年間スケジュールを周知し、計画的参加を促す。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
7	多様な研修制度の運用と研修生のニーズに即した就農支援の実施	1 関係機関との連携による進路調整	1 アグリチャレンジ科は、農業に関する基礎訓練として定着しつつあり、各機関の就農相談においても、農業未経験者に第一に促す研修として浸透してきた。今後は、雇用拡大により経営発展を目指す経営体の育成とあわせた制度運用をさらに意識し、引き続き市町村、普及所、JA、担い手育成機構等関係機関との意識統一と情報共有を図り、研修生の進路調整を進めていくことが必要。		1 雇用就農意向の研修生の就職に向けて、研修調整員による研修生情報および雇用可能な経営力を有する経営体情報について関係機関と共有することに一層努める。	・各研修生の背景・意向と研修進捗を踏まえながら、随時個別面談を実施。関係機関を交えた打合せ、就農計画検討を重ね、各者がスムーズに就農に至るよう、現場を意識したコーディネートを実施。	A		
		2 地域と連携した産地主体型研修の運営	2 先進農家実践研修は、就農予定地域での生産部等を主体とした受入体制構築が必須である。その調整には従前多大な時間と労力を要す中、6市町（鳥取市、八頭町、倉吉市、湯梨浜町、北栄町、琴浦町）で10件の研修を実施し、いずれの研修生とも就農（見込み含む）に至っている。運営開始から4年目となり、産地主導で研修を仕組む動きも新たに生まれている。	2 ・産地主体型の新規開始研修 3件	2 湯梨浜町（東郷果実部）、倉吉市（倉吉西瓜生産部）など、産地主体型の新たな受入体制構築の動きと絡めて、研修ツールとして先進農家実践研修が活かされるよう、関係機関との調整を進める。	・平成31年2月より、倉吉西瓜生産部が主体となった2件の研修がスタートできた。 ・琴浦町のミニトマト生産部による研修受入の体制が整い、現スキルアップ研修生1名が本年10月より同生産部主体の研修を実施することとなった。 ・産地研修生の意向を反映し、研修生の習熟度や希望によって研修期間を1年間延長可能とした。	B	・大山町、米子市など、これまで先進農家実践研修が実施されていなかった市町において、実施に向けた検討が進み始めた。市町、JA、普及所を交えた中で実施体制について検討を重ね、中部での生産部主体の実施ケースをモデルとして取り組む。	・研修生のゴールは「農業で食べていく」ではなく、これは土台である。「地元で根付き、助け合う」ことがゴール。地元自治会や普及所など関係者全てでバックアップできるように、溝ができないよう支援して欲しい。 ・一人でも多く就農に繋げて欲しい。
		3 新規研修の周知	3 就農品目の栽培管理基礎を習得するスキルアップ研修は、今年度、4ヶ月間の短期研修を創設した。白ねぎ、ブロッコリー、ミニトマト、スイカの野菜主要4品目に限定し、年5回開講する。新規研修であるため、当面、周知の徹底を要する。	3 ・新規研修（スキルアップ研修のうち短期研修）の受講者 10名	3 各種機会を活用し関係機関への再周知を図り、就農相談時に適切に提示していただけるようにする。また、JAの協力を仰ぎ、募集時期をとらえた各JA広報誌への記事掲載を行っていく（研修修了後、研修生が各生産部に属することを想定）。	・新規研修の受講者は5名であった（白ねぎ4名、ミニトマト1名）。 ・JA鳥取中央広報誌へのお知らせ掲載を実施した。	C	・JA広報誌への情報掲載により問い合わせ件数は増えたが、受講につながらないケースも多かった。品目設定、開講頻度など、求められる研修内容についてさらに検討したい。	
		4 新規就農の優良事例発信	4 本校研修を経て独立自営就農した方、アグリチャレンジ科受講をきっかけに雇用就農に至った方等、近年で様々かつ優良な就農事例が生まれている。今後就農を検討する方に対し、これら事例の情報提供は有効であるが、従前積極的に行えていなかったのが実状。	4 ・HPを活用した研修修了生就農事例の紹介 10事例	4 今年度、まずはHPでの情報発信を行う（印刷物として事例集を作成よりも発信が早い。就農相談対応時に必要な事例を提示することも可能。）。	・取材の上、各種事例（独立就農、親元就農、雇用就農）を取りまとめた上で、詳細版を就農相談時に必要に応じて提示する等活用した。 ・年度内にHPでの発信予定。	C		
		5（GAP関連）研修拠点施設の適正管理	5 農業学習館は、スキルアップ研修野菜専攻の拠点施設であり、栽培管理に係る資材・小農具・出荷資材・各種工具などを保管するとともに、毎日出荷調製作業を行う場所として活用している。日々の整理整頓の徹底について、自営開始を志す研修生に意識付けしていくことが重要。	5 ・誰にでもわかる収納への改善と表示の徹底化	5 改めて、農業学習館内の点検を研修生とともにし、作業性を考慮した物品の配置と、わかりやすい収納のための表示の徹底を行う。	・作業場の物品の配置、道具類の分類を再点検するとともに、整理整頓を心掛けた。 ・損壊した物品、不要なものを放置せず、廃棄若しくは修繕による再活用を図った。 ・研修生が就農など確実に実践できるようになった。	A		